

気候変動と飢餓、紛争，“カミカズ (Kamikaze),” そしてテロに対する人々の恐怖感と怒り

大 山 修 一 *

不順な降雨と経済の落ち込み

2015年11月、一年ぶりにニジェールの首都ニアメを訪問した。ニジェールはリビアやナイジェリア、マリ、チャドといった紛争や内戦、テロの問題をもつ国に囲まれている。隣国ブルキナファソでは、2015年9月に軍部による暫定大統領の拘束事件とそれとともに市民による抗議デモと暴動も起きた。ナイジェリア北部で破壊活動をつづけているボコ・ハラムは2015年1月に国境を越え、カメルーンやチャド、そしてニジェールにも越境するようになった。日本政府外務省の海外安全情報により、ニジェールにおける日本人の活動は首都ニアメとその近隣地域に限られている。

わたしの今回の目的は、ニアメを拠点とした研究活動と環境修復活動の準備、そしてニジェール政府の環境省や家畜省、農業研究機関、ニジェール市、そしてJICAや国際機関とのネットワークをつくることにあった。このネットワークづくりは、2015年10月より着手することになった三井物産株式会社の助成による環境修復活動を開始するための準備である。

到着した後、長年の友人であるイブラヒム

とともにニアメ市内のグランマルシェやプチマルシェを歩いた。ニジェールの11月は収穫期を終え、農村も都市も経済活動が1年のなかでもっとも活発になる時期である。本来なら、道行く行商人や商品を運ぶポーター、買い物客などでごったがえし、マルシェはものすごい活気に満ちているはずである。しかし、イブラヒムは、「今年は、どうも金まわりがよくない」という。いわれてみると、たしかに、昨年までに比べて人がすくないように思えた。わたしがいつも買い物をする、ひいきの商店が扱う品数も減り、活気が足りないように感じた。

その理由をイブラヒムにたずねると、6月から9月までの雨季のあいだ雨の降り方が悪く、豪雨の頻度が増加した結果、農業生産が低下したのが一因だという。エルニーニョの影響があるのかもしれない。サヘル地域は温暖化やエルニーニョの影響により、豪雨が増えるといわれる。イブラヒムは国立気象局に勤めていることもあり、その言葉には確信があるようだった。サヘル地域の雨の降り方は地域によって大きく異なるため、作物収量の地域差は大きくなるのだが、播種時期、トウジンビエの登熟期や収穫時期の降雨不順は

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真 1 ニアメ市における大雨による家屋の
倒壊 (2012 年)

収量の低下をまねくのである。2000 年までは小雨一つまり、干ばつが問題であったが、近年では多雨が問題になることがあり、2012 年にはニジェール川の水位が上がり、ニアメ市内の一部が冠水するといった被害が出た (写真 1)。

「飢餓はすべての問題を生みだす」

「飢餓はすべての問題の根源である (Nyunwagidan matsala)」—わたしが調査をつづけているハウサの人々がよく言うことわざである。飢餓になると、農村の経済活動が停止する。ハウサの人々は日常生活のなかで「ハルクキ」という言葉を多用するが、飢餓に陥ると、この「ハルクキ」がなくなるのである。ハルクキという言葉は「動き」全般を意味するが、それは農業や牧畜、商売、出稼ぎなどの活動、人や家畜、物や金の動きを示すものであり、国内の政治や景気、経済の動向などにも通じる言葉である [大山 2015]。「イナ ハルクキ (ハルクキはどうですか)」というハウサ語のあいさつには、大阪商人の「儲かってまっか？」に近いニュアンスがある。景気がよい

ときには人や金、物は活発に動き、逆に景気の悪いときにはその動きは不活発になるのである。すべては、「動き」で表現される。

11 月から 5 月までの長い乾季のあいだ、ハウサの男性たちは積極的に村を出て、都市への出稼ぎに出かけていく。ニアメやマラディ、タウアといった国内の大都市のほか、ガルミといった小さな町での小商い、ナイジェリア北部やベナン、コートジボワールの都市における商い、ブルキナファソでの金掘りといった、さまざまな仕事に従事する。それらの元手となるのが、出身村における農業生産である。人々は農作物を販売して現金にすることによって、都市に出る交通費を捻出し、都市で販売する商品を仕入れるのである。雨の降り方による農業生産の低下は、人々の出稼ぎや経済活動に大きく影響する。降雨の不順によりハルクキが減ることは都市や農村での人々の活動が停止し、生活に困窮する者が増えていくことが予想されるのである。

作物収量の落ち込みは、農村住民の不満や苛立ちを生むことになる。ハウサの言葉では、飢餓 (nyunwa) は人々の怒り (fushi) を生むのである。農耕民は畑のちかくで放牧するフルベやトゥアレグの家畜をみただけで、牧畜民に作物損害の賠償金を求めたり、家畜を奪おうとしたりする。2015 年 8 月には、農耕民が自分の畑でウシの足跡をみつけただけで、近隣の牧畜民に 150,000CFA (3 万円) を請求した例や、11 月にウシが自分の畑のトウジンビエを食べたといって、農耕民が牧畜民に 100,000CFA を要求した例など、農耕民と牧畜民の軋轢が高まっている。



写真2 水場に集まるトゥアレグの牧夫と家畜

牧畜民も農耕民に要求されるままに賠償金を支払ったり、家畜が奪われるのを黙っているわけではない。手元にもっている剣で応戦し、反撃に出ることも増えている。牧畜民が勝手に村の井戸から水をくんだといって、農耕民が文句をいったことがきっかけで大規模な武力衝突に発展し、農耕民と牧畜民あわせて9人が死亡した事件もある。飢餓の発生は農耕民と牧畜民の関係性を悪化させ、紛争の件数が増加するとともに、その規模も大きくなり、深刻なものとなる（写真2）。

身近に潜むボコ・ハラム問題

わたしは過去の調査のなかで避けてきた問題がある。それが、ボコ・ハラムという組織に関連した社会問題である。それは現在のニジェール国内では重要な問題であるものの、首都ニアメの日常生活のなかで人々のあいだで話題に上がることは多くない。ボコ・ハラムはハウサ語で「西洋教育は罪である」を意味する。

原油価格の高騰により石油輸出の好況にわ

くナイジェリアの経済成長のなかで、開発の遅れた北部のイスラーム地域でボコ・ハラムは活動を開始したといわれる。ナイジェリア国内での問題と考えられてきたが、2015年に入ってボコ・ハラムは「Province of West Africa」（IS 西アフリカ州）と名乗って攻勢を強め、ナイジェリアやチャド、カメルーン、ニジェールの国境付近、チャド湖周辺では村の焼き討ちや村びとの殺戮を繰り返し、各政府の合同軍と交戦をつづけている [Trofimov 2015]。

ナイジェリア北東部と隣接するニジェール東部のディッファ州には避難民が流入し、2015年6月の段階で45万7,000人が食料支援を必要とし、そのうち26万人に食料が配給されたという報告がある [WFP 2015]。2015年12月現在、ディッファ州に居住する人口の3分の1以上に相当する60万人が国内避難民となり、151カ所の学校が閉鎖に追い込まれたという [Trofimov 2015]。わたしの滞在中にも、ニジェール南東部の町ボッソウがボコ・ハラムによる攻撃を受け、11軒の家屋が焼き討ちにあい、9人が死亡したというハウサ語のラジオ報道があったばかりである。

今回の滞在中、ボコ・ハラムについて、ニアメに居住する人々の意見を聞いてみた。ニアメ市内にもボコ・ハラムのメンバーがいるのではないかと警戒する人もいて、ボコ・ハラムの問題は身近に潜む問題として、大勢の人々で話しあう話題ではない。ましてや、知らない人物を相手にボコ・ハラムのことを気軽に議論するようなことはしない。イブラヒムをふくめ親しい友人たちに対して個別にイ

インタビューを試みると、みなが自分の問題として語ってくれた。

話してくれた内容には、共通性がある。ボコ・ハラムはもはやイスラームを信じるムスリムではないということだ。最初、ボコ・ハラムはジハード（聖戦）と称し、非ムスリムを攻撃したり、誘拐を繰り返してきた。しかし、近年ではムスリムをも殺すようになり、その残虐性はイスラームを信じるムスリムの姿ではなく、ボコ・ハラムは矛盾を抱えているというのである。ヤギやヒツジなどの家畜を屠るように人間の首を切り、その動画を発信しつづけるボコ・ハラムは、もはやムスリムのあるべき姿ではなく、人間の所業ではないと強く批判する。

ある女性は、ナイジェリア国境に隣接するボッソウ県に弟一家が居住しており、しばしば電話で生活ぶりを聞いている。町なかではニジェール軍の軍隊や警察が警戒態勢を敷いており、治安はいちおう保たれているという。それでも、ボコ・ハラムによる襲撃事件が発生する。ニジェール国内の町では、ふつう、日中の暑さを避け、夕暮れどきから夜遅くまで商店が営業し、行商人や買い物客が行き交うが、ボッソウ県ではボコ・ハラムの襲撃後、午後 6 時以降の夜間には外出が禁止されており、まったく外出できないという。襲撃される危険性があるため、自分の畑で農作業をすることもままならないという。ボコ・ハラムが移動手段として使うバイクの使用も禁じられている。この女性は弟家族の困窮ぶりから、ニアメから送金していると話してくれた。

ボッソウでは、政府軍は自爆テロを警戒し、ヒジャブと呼ばれるスカーフを女性が身にまとうことを禁止している。ナイジェリア北東部では女性や子どもが爆弾を体にまき、スカーフで隠すという自爆テロが頻発しているためである。この自爆テロは、ニジェールではカミカズ (*kamikaze*) と呼ばれている。フランス語読みで、カミカズである。フランスで発生したテロに対する報道を契機に、ニジェールにおいても自爆テロをカミカズと記しているが、その語源を知る人はだれもいなかった。2015 年 11 月 22 日・28 日号の『Jeune Afrique』誌のテロ特集のなかでもカミカズという表記がみられた [Groupe Jeune Afrique 2015]。このカミカズは、日本の太平洋戦争末期の神風特攻隊に由来している。インターネット上では、日本の国土、そして父母や妻、子どもを守ろうとした神風特攻隊と、破壊や殺戮などの反社会的活動を繰り返す自爆テロを同一視すべきでないという記事が多い。

ボコ・ハラムが社会を蚕食する危険性

国連開発計画 (UNDP) が 2014 年に発表した人間開発指数では、全 187 カ国のうちニジェールは最下位にあり、経済や国民生活、医療・健康、教育、女性の社会参加、どの指標もきわめて低い状態にある [UNDP 2014]。この人間開発指数を算出する根拠となったデータの一部を紹介すると、ニジェールでは 15 才から 19 才までの女性 1,000 人あたりの特殊出生数は 204.8、周産期死亡数は 10 万人あたり 590 人、乳幼児死亡率は 1,000 人あたり 63 人、5 才未満死亡率は 1,000 人

あたり 114 人、5 才未満の栄養失調は 43.9 パーセント、1 日あたりの所得が 1.25 ドル未満の人口比率 43.6 パーセント、平均寿命は男性 58.3 才、女性 58.6 才という厳しいデータが並ぶ。人間開発指数は、各国における住みやすさの指標とされることもあるから、残念ながらニジェールは世界中でもっとも住みにくい国ということになる。

2000 年から 2010 年にかけて年平均の人口増加率は 3.5 パーセントと非常に高い [World Bank 2012]。この数字は 21 年で人口が 2 倍になる驚異的なペースであり、このような人口の急速な増加は耕作地の不足、干ばつによる飢餓、貧困の問題に直結する。わたしの調査している村でも、2000 年に 280 人だったのが、2010 年には 504 人にまで増加した。

調査をつづけている農村では、食料を自給できるのは約 60 世帯のうち、2 割にも満たないのがごく普通である。この割合は雨の降り方や援助でもたらされる化学肥料や改良種子の量によって上下するものの、およそ 8 割の世帯が慢性的な飢餓のリスクを抱えているのである。最近、老齢男性の畑が息子たちに生前分与されたり、遺産相続がおこなわれたりしているが、息子が 5 人以上いるケースが多く、土地の分割では息子たちで激しい争議になる。争議の結果、父親の土地は分割されるが、息子たちが所有する畑の面積は父親の世代よりも確実に縮小している。父親の世代でも食料は自給できなかったのに、小さく分割された畑で息子たちの世代が自給できることはない。ハウサ語でタラカ (*talaka*)

と呼ばれる貧乏人が増えるのも当然である。

ニジェールは経済格差の大きな国である。ニアメの高級住宅街では豪華な邸宅が多数あり、乗用車を何台も入れることができる車庫がそなえられ、ガードマンがいつも入り口を守っている。立派なランドクルーザーやベンツをみることも多い。ニアメでは、マッカ巡礼へ行った男性（ハッジ）や女性（ハジャ）も増えている。インタビューから、ニジェールは貧しい国なのではなく、富の分布が偏っており、経済格差の拡大に問題があると話す人が多い。政治家や高級官僚の多くはサイド・ビジネスを展開する商人でもあることが多く、この少数の特権階級に富が集中する一方で、大部分の国民は食うに困りさまなのである。この格差社会にボコ・ハラムは侵入し、社会を蚕食する基盤がある。人々が日常生活でボコ・ハラムの問題に言及するのを避けるのは、だれにでもボコ・ハラムに参画する要素がニジェール国内の人々にはあるということだ。

ひとりの男性が語ってくれた。「ボコ・ハラムは、貧しい農村に住む 15 才～30 才までの若者に金を支払い、武器を渡す。定期的に給与も支払う。金払いがよく、その現金は農村で食うに困っている若者には魅力的だ。農村ではハウサ語でチゾと呼ばれる 60 代から 70 代までの長老連中が村行政をとりしきっていることが多い。しかし、チゾたちは文字を読むことも書くこともできず、町から来る行政文書を読むこともできないし、飢餓どきに文書を書いて政府に援助を求めることもできない。携帯電話を使ったり、バイクに乗っ

たりすることもできない。ラジオを使うのが精一杯だ。息子たちの世代が十分に暮らすだけの財産を残すこともできない。ボコ・ハラムは、社会に不満をもつ若者に拡大する危険性が十分にあるのだ。」

気候変動による降雨の不順と作物収量の低下、経済状況の悪化は飢餓や貧困の蔓延を引き起こす結果、ボコ・ハラムが拡大し、各地で破壊活動をつづけ、社会を混乱に導く危険性を高めている。経済格差の問題はニジェールに限った問題ではないだろう。世界は、富の公平な分配をどうすすめていくのか。われわれの眼前には、厳しい現実が横たわっている。

引用文献

大山修一. 2015. 『西アフリカ・サヘルの砂漠化に挑む—ごみ活用による緑化と飢餓克服、紛争予防』昭和堂.

Groupe Jeune Afrique. 2015. *Jeune Afrique: International Indépendant*. No. 2863. 22 au 28 Novembre 2015. Paris.

Trofimov, Y. 2015 (December 4-6). Boko Haram threat expand beyond Nigeria, *The Wall Street Journal*.

UNDP (United Nation Development Programme). 2014. *Human Development Report 2014 Sustaining Human Progress: Reducing Vulnerabilities and Building Resilience*. <<http://hdr.undp.org/en/content/human-development-report-2014>> (2015 年 12 月 4 日)

WFP (World Food Programme). 2015. *Food Security and Humanitarian Implications in West Africa and the Sahel*. No. 66 July 2015. <[http://reliefweb.int/sites/reliefweb.int/files/resources/Joint%20Note%20July_2015_English_FAO_WFP_14%208%202015\[4\].pdf](http://reliefweb.int/sites/reliefweb.int/files/resources/Joint%20Note%20July_2015_English_FAO_WFP_14%208%202015[4].pdf)> (2015 年 12 月 4 日)

World Bank. 2012. *World Development Indicators 2012*. <<http://data.worldbank.org/sites/default/files/wdi-2012-ebook.pdf>> (2015 年 12 月 4 日)

支援者との思い出

—東ネパール山間部のダカ織工房でのインタビューより—

高 道 由 子 *

私はこの夏、ネパールでダカ織という織物についての調査をした。国内情勢の影響で、生産地として有名で最も訪れたかったテラトゥム郡には、調査の終盤に 1 週間滞在することができたのみだった。それでもその短い

日々は、今回の調査期間の中で最も色鮮やかな記憶として残っている。テラトゥム郡はネパールの東側の山間に位置する。私が滞在したテラトゥムの M という町では、リンブー民族の女性に織りの文化が受け継がれている。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科